

Title	〔コメント三〕 アジア太平洋戦争と慶應義塾
Sub Title	Some issues on historial studies of Keio University in the Asia-Pacific War period
Author	都倉, 武之(Tokura, Takeyuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・ 3 (2011. 6) ,p.104(202)- 111(209)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：キャンパスのなかの戦争遺跡： 研究・教育資源としての日吉台地下壕
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔コメント三〕

アジア太平洋戦争と慶應義塾

都 倉 武 之

趣 旨

冒頭でまずご説明申し上げたいのは、私の所属する福

沢研究センターのことです。福沢研究センターと申しますと福沢諭吉の顕彰機関のようですが、英語名を見てみますと「Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies」とあります。つまり、近代日本研究センターなのです。設立趣旨に依りますと、福沢諭吉研究を通じて近代日本研究のほかに、福沢門下生研究、慶應義塾史、また義塾出身者の研究や資料収集も範囲に含まれております。つまり慶應義塾で、学校史（大学史）を担う機関は当センターということになっております。

率直に申し上げて、慶應義塾では福沢という存在が大

きすぎることもあり、福沢没後の塾史研究は、いわば傍流の扱いで、必ずしも十分な注意を払われてきたとはいえません。

そもそも大学史研究という分野は、広い視野を求められつつも、実際は一大学という独自の組織とその文化を対象にするものであり、関心を持つ人が限定的で、視点も閉鎖的になりがちです。また学界でも十分な批判を受けずに、一度活字になったものが再生産されることの多い分野でもあります。福沢という非常に個性の強い創立者と特色ある建学の精神の下に歴史を重ねた慶應義塾もその点は同様であると思われれます。

本日は、日吉台地下壕に関する発表にあわせて、現在慶應義塾と戦争、主に一九三七（昭和一二）年の日中戦

争以降、太平洋戦争終結に至る期間、とりわけ太平洋戦争期の慶應義塾に関する研究の現状や問題点などについてご紹介させて頂きたいと思えます。

研究の視点

まず、この時期の慶應義塾史に向けられている研究の視点を五つ挙げておきます。

(一) 慶應義塾史編纂

第一は慶應義塾自身による自校史の編纂という研究契機が存在します。近代的な教育機関として最も長い連続的な歴史を重ねている慶應義塾では、折々に年史を編纂していますが、十分学術的な評価に堪えられるものとして『慶應義塾百年史』全六巻が一九五八〜六九（昭和二三〜四四）年にかけて刊行されました。これにより義塾史に関する基礎的情報が整理、記述されました。これは大学が編んだ年史としては先駆的な大事業であり、当時の義塾の総力を挙げた画期的な刊行物でした。戦争期の記述についていえば、体験当事者が編纂したこととなり、単純な事実誤認などは少ない反面、時間経過が短すぎ、十分筆が尽くせない部分や、簡略に済ませている部分があります。さらにこれをもって大規模な事業としての塾

史編纂は一段落となつてしまい、時間経過と共に現れた新たな資料や証言などを収集したり、通史の中に組み込む機会を失ってしまうこととなりました。

また、編纂を担った塾史編纂所の後継機関・塾史資料室を改組して一九八三（昭和五八）年に福沢研究センターが成立したことで、福沢研究に軸足を置く名称の機関が塾史を担うこととなりました。

百年史刊行後、戦争期の義塾に関する研究を補つたものとして、経済学部の白井厚現名誉教授とその研究会による共同研究があります。一連の研究により、戦時下の慶應義塾および塾生たちの様子について基礎的な資料が広く収集され、分析されたことは、今では得難い重要な蓄積となっております。

慶應義塾として戦時の歴史をどう総括していくかという問題は、むしろこれから本格化されなければならない状況にあるといえるかと思えます。

(二) 福沢論吉論の転回

第二として、福沢論吉について論じる必要があります。福沢が没したのは一九〇一（明治三四）年であり、戦時下には無関係のようですが、慶應義塾においては、福沢の説く「独立自尊」あるいは「実学」の精神が日頃より

あらゆる場面で論じられ、福沢は非常に大きな影響力を持つ存在でありました。しかし戦時下では福沢を自由主義の導入者、功利主義の主張者などとして批判する声が高まりました。たとえば、陸軍予備士官学校の教科書における福沢批判、後ほど触れますが、徳富蘇峰による福沢及び慶應義塾批判などがよく知られる事例であります。社会的に大学生全体が肩身の狭い立場に置かれていたことに加え、慶應義塾特有の非難の声が学校に向けられ、それが時に学生に向けられることがありました。

これに対して主に慶應義塾出身者によって、福沢の国権主義的言論を強調して擁護する論陣が張られました。

また、福沢著作の普及によって誤解を解こうとする動きもありました。しかし皇室や爵位に関する記述など、時局下では許容されない多くの箇所を検閲を受け、一九四二(昭和一七)年に編纂が開始された福沢の選集(全一二巻計画)は、一冊のみで頓挫してしまいました。

慶應義塾の学生新聞『三田新聞』の学徒出陣記念号(一九四三〔昭和一八〕年十一月一日付)に掲載された、丸山真男による論文「福沢に於ける秩序と人間」は、福沢を「個人主義者たることに於てまさに国家主義者」と評しています。当時の最大限の表現として非常に象徴

的な一句と言えるかと思えます。

さらに福沢研究は、このことによって非常に大きな歪みを生みます。戦時下で強調された「国権論者・福沢論吉」を強調する言説や文献が、戦後の福沢研究において批判的に取り上げられ、「アジア侵略論者・福沢論吉」という議論が台頭する一因となりました。戦時下で福沢論吉像が如何なる転回を見せ、それがその後の研究史に如何なる影響を与えたかは、慶應義塾史の側面からも、また近代史上の福沢を研究する上に置いても極めて重要な視点であると考えます。

(三) 塾長小泉信三の評価

第三に一九三三(昭和八)年末から一九四六(昭和二一)年末まで慶應義塾の塾長(理事長兼大学総長)を務めた小泉信三をどのように位置づけるか、という問題です。小泉信三の父は信吉(のぶきち)といい、一八六六(慶応二)年に慶應義塾に入った福沢門下生で、慶應義塾が一八九〇(明治二三)年に大学部を設置するに当たり塾長となった人物でありました。また、横浜正金銀行や日本銀行の草創期に活躍した経済人であり、福沢との繋がりが非常に強かった人物です。小泉信三は、幼少期にその父を亡くし、それを憐れんだ福沢の家に同居して

いた時期もあり、福沢の思想と慶應義塾の維持に対して非常に強い自覚を有しておりました。彼の塾長時代の演説や訓示などには、盛んに福沢が説かれ、名が挙げられていない場合でも強く意識されており、一九四〇（昭和一五）年に塾生に対して発表した「塾長訓示」と呼ばれる文書は、福沢が塾生に求めた「気品」を平易に説き直したものとされ、今日でもよく知られております。また、徳富蘇峰が一九四四（昭和一九）年に『言論報国』という雑誌に福沢諭吉及び慶應義塾への厳しい批判を掲載したことに對して、長文の反論を記して對抗したことは、彼の姿勢をよく表していますので、少しご紹介してみたいと思います。

徳富の批判は次のような記述です。

「福沢先生は薩長政府に對して一番大いなる存在であつた。この点は実に先生は偉いと思ふが、然し西洋のことを無茶苦茶に輸入する点に於ては、伊藤や陸奥なんかの比ぢやない。より以上のものである。∴日本の従来の良風美俗をして地を払ふに至らしめたことについては、福沢先生はまことに重大なる責任を持つておられることと思ふ。∴弟子の方は先生より相当下つたところまで落ちて行つたんじゃないかと思ふ。∴独立

自尊といふことは要するに個人主義を異つた言葉で説明したものである。∴例へば国家の大事でも自分に於ては何等頓着ない。今日の戦さでも、誰が戦さをして居るか。まるで外の人が戦さをして居るといふやうなわけであつて∴独立自尊でやつて行く以上は愛国といふことなどは縁が遠くならざるを得ないやうな結果になつて来た。」（徳富蘇峰 一九四四・三『言論報国』第二卷第三号）

これに對して小泉は、福沢の国権主義者としての側面を強調する資料を引用し「以上に掲げた諸章句は『西洋のことを無茶苦茶に輸入する』者の言葉としてはいささか不似合ひのようと思われ、むしろその反對を示すように思われますがどうでしょう」とせまり、さらに慶應義塾全体に向けられた批判には、次のように答えています。「福沢に教えを受けたものといへば、私共の同窓の者は皆さうです。さうして其中の幾千百の青壯年は今陸上海上空中に於て戦つてゐます。さうして彼等は皆福沢先生の名を口にして襟を正すものですが、それ等凡ての者が非愛国者だと徳富氏は言はれるのですか、まさかそんな事を言はれるとは思ひません。∴それに就けても仮りに一部の言論家が国を思ふの余りとはいひ

乍ら愛国報国の専売特許を与へられたが如くに立ち振る舞ひ、他を排し他を難するに急で、同胞国民中に非愛国者を求め之を数へて其の多きを樂むかの如き外観を呈することが——無いとは思ひますが——万一ありましたならば、敵米英の喜びこれより大なるものは無いと存じます。」(小泉信三 一九四四・五・一〇『三田新聞』)

この論争に端的に示されるように、小泉は福沢擁護の先頭に立ち、また義塾において戦時に対応した福沢論を説き続けました。

一方で小泉塾長自身が、後年戦時中は「時には荒っぽい言葉を使った」(小泉 一九六六『私の履歴書』)と振り返っているように、積極的に戦意高揚に協力したと評価される言動や行動も残しています。

小泉塾長の行動は、私立大学としての慶應義塾が置かれた立場や、福沢批判という特殊事情などを踏まえて、どのように評価すべきであるか、多くの議論があります。評価を一層難しくしているのは、小泉のキャラクターで、彼に一種のカリスマ性があり、戦前戦後を通じて塾生や卒業生に大変人気があった一方、強固な批判者も多かったという事実です。

復員してきた慶應義塾出身者の中には、戦時のあり方を擁護し、小泉を高く評価する人々も多い一方で、小泉を激しく非難した人々も少なくありません。学内でも支持者と反対者が常に存在し、人間関係や派閥が当時の回想や記録などにも影響しています。小泉は空襲による負傷で在職のまましばらく執務不能となりましたが、戦後、主に塾生と教員の一部に小泉の戦争責任を問う退任要求派と、古老OBを中心とする塾長支持派が生じました。結局高橋誠一郎が塾長代理に就任して職務を代行しつつも、小泉は任期を全うして退任しました。

さらに彼は、終戦直後の東久邇宮内閣の閣僚候補に挙げられた事実があり、その後東宮御教育参与に就任、塾長退任後は戦後の皇室改革に大きな役割を果たしました。すなわち軍国主義を排し、日本を再建していくという戦後の方向性に合致する人物と評価されていたこととなります。同時に皇室との深い関係は、戦後の思想風潮からは、新たに批判的に小泉を論じる糸口となりました。これらの事実も、相半ばする小泉の評価を一層混迷させています。

小泉塾長をどのように位置づけていくか、という問題も慶應義塾と戦争を研究する上では大きな課題として議

論されています。

(四) 塾生、塾員(卒業生) 研究

第四の視点として、塾生個人やその活動などの研究を挙げたいと思います。まず塾生や卒業生の全体像を把握する上で、白井ゼミの研究の成果は貴重です。これによって戦没者の全容(現在までに二二二五名の戦没者を把握)、また塾生の意識などについても、検討するための資料や分析の試みが提示されております。

このほかには、たとえば『さけわだつみのこえ』(岩波文庫)の巻頭を飾る遺書を残した上原良司など戦没した塾生や塾員の個別研究、『三田新聞』、政治団体などの学生団体に関する研究、あるいは学徒出陣の前に開かれたいわゆる「最後の早慶戦」に関する研究、幼稚舎の疎開学園に関する研究、復員した慶應義塾出身者による自伝史の蓄積など、個別には様々な研究や研究資料の蓄積があります。これらを如何に関連づけて分析し、慶應義塾史、また近現代史の中に位置づけていくか、ということも今後の課題であろうかと思えます。

(五) 日吉台地下壕

第五として、地下壕研究を挙げておきたいと思えます。地下壕については、日吉台地下壕保存の会という市民活

動の中で研究が蓄積されました。地下壕が如何に構築され、使用され、そこで如何なる戦争指揮が行われたのか、また米軍に接収された時代を含めた日吉キャンパスの歴史に関する調査の蓄積もなされました。これまでのオーラルヒストリーの蓄積や、足で積み上げた調査資料を、今後は学内外の様々な資料や研究と関連づけながら、より精緻な研究へと深め、慶應義塾史の中に位置づけていくことが求められると考えます。

問題点と展望

以上、慶應義塾と戦争をテーマとして、今日まで蓄積されている研究の視点を五つ申し上げました。次に、今後研究を深めていく上での問題点と展望として四点挙げておきたいと思えます。

(一) 資料収集の必要性

第一に、一層の資料収集の必要性です。戦時下の資料は、申し上げるまでもなく、物資不足の中でそもそも少なく、残っているまでも極めて状態が悪く、また戦災によって失われた重要資料も少なくありません。加えて戦没者遺族あるいは戦争体験者の高齢化・世代交替が進み、急速に失われております。

すでに存在する重要な資料群には白井厚研究会による調査研究と、福沢研究センター所蔵資料があります。資料集積をさらに充実させていくことが、今後の研究のためには不可欠と考えます。すでに福沢研究センターとしても、慶應義塾の卒業生向け機関誌『三田評論』において、資料提供の呼びかけなどの取り組みを始めております。写真、日記、モノ資料など、幅広く収集していきたいと考えています。

(二) 評価の困難

第二に、研究上の大きな問題として評価の困難さがあります。戦争に対する見方には、今なお様々な政治的立場が存在します。このことは、研究促進の大きな妨げになつていくように思われます。この戦争をどう呼ぶかということさえ、多くの議論がある状態です。また、戦争体験当事者の人間関係、上下関係等が、残された資料に大きな影響を与えていることが少なくありません。慶應義塾においては特に小泉塾長を巡る評価、あるいは学内の戦争協力という問題を論じる上で大きな問題となるかと思ひます。

戦争責任、戦後の適格審査、公職追放などに関連する資料については、慎重な扱いが求められ、資料の利用が

制約される現状があり、資料公開に関する限界と向き合つていく必要があります。また、オーラルヒストリーをどのように研究対象としていくかも、大きな課題といえましょう。

資料を蓄積すると共に、それを解釈し、評価していくあり方について、これは慶應義塾史に限った話ではありませんが、一層議論がなされる必要があります。

(三) 学術研究の深化の必要

第三に、学術研究の深化と漠然と書きましたが、市民活動を主体として蓄積された研究があり、また一方で非常に閉鎖的に蓄積された大学史研究、あるいは様々な戦争史研究の蓄積があります。大学や諸団体間、あるいは様々な専門分野の研究者の間での情報交流の中で、研究を一層深化させていく時期に来ていると考えます。今回の考古学的調査もその一つといえます。そういった連携の中で、一層の資料発掘、あるいは資料の公開や利用の促進が図られることが期待されます。

(四) 教育方法の模索

第四に、研究成果をどのように教育現場に還元していくかという問題です。幸い慶應義塾では、戦前から三田日吉、信濃町などのキャンパスは同じ土地に存在し、戦

前より存在する校舎もいくつか残され、それに加えて地下壕が存在しています。これらをどのように教育に活用していくかという点も、研究の深化との両輪で議論が深められるべきものと考えます。また、戦争に関する研究成果を、どのような形で学内に残していくか、たとえば記念碑（三田の「平和来」（一九五七年）、「還らざる学友の碑」（一九九八年）など）、たとえば戦没者名簿（二〇〇七年）という形が実現を見ているわけですが、戦没者追悼という問題と共に、継続的に議論が必要な問題といえます。

さらに、教育にあたっては、研究成果の解釈、評価をどう付与していくかも、慎重に議論されなければなりません。この問題は、その後の研究教育の広がりや閉ざしてしまふことにも繋がりがかねず、特に慎重に議論が重ねられることが重要であると思います。

おわりに

以上、あれこれ問題提起を並べたに過ぎませんが、慶應義塾に関連する戦争研究の現状と問題点について概観してみました。

端的に申し上げて、慶應義塾においては、福沢研究の

大きさの影で、福沢没後の学校史研究、特に戦争期の研究は、極めて手薄といわざるを得ません。慶應義塾には独自の文化や思想が存在し、戦争期の研究においても、それは特色をなすものとなります。それらを十分見据え、なおかつ過大評価に陥らないよう注意しながら、近代史上の慶應義塾の位置や役割、またその限界をも論じていく環境を一層はぐくんでいくことが重要であると考えます。

また、日吉台地下壕は慶應義塾が期せずして抱えたものとはいえ、むしろそれを奇貨として有効に活かし、近代日本史上の大学、また戦争について考える契機を慶應義塾内において積極的に模索していくことが重要ではないかと考えます。